



Title	The Shadow-Line における瞬間
Author(s)	西村, 由利子
Citation	Osaka Literary Review. 1991, 30, p. 58-70
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25471">https://doi.org/10.18910/25471</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## *The Shadow-Line* における瞬間

西 村 由 利 子

Only the young have such moments. I don't mean the very young. No. The very young have, properly speaking, no moments. It is the privilege of early youth to live in advance of its days in all the beautiful continuity of hope which knows no pauses and no introspection.

One closes behind one the little gate of mere boyishness — and enters an enchanted garden. Its very shades glow with promise. Every turn of the path has its seduction. And it isn't because it is an undiscovered country. One knows well enough that all mankind had streamed that way.... One goes on. And the time, too, goes on — till one perceives ahead a shadow-line warning one that the region of early youth, too, must be left behind. (p.3)<sup>1)</sup>

Joseph Conrad の *The Shadow-Line* は、冒頭、上のような文章で始まっている。止まることも、顧みることも知らぬ、美しき希望の連続のうちに生きる若き溢るる者、青年前期("early youth")には「瞬間」("moments")など存在しはしない。だがしかし、歩を進め、時も進むにつれて、人には前方に、「その青年前期の領域も、やがて後にしなくてはならぬ」ことを警告する“shadow-line”<sup>2)</sup>が見えてくる。人生のそういった時期に、「瞬間」が訪れるというのである。そしてさらに、「どういった瞬間か」という問い合わせに対し、次のように言葉を続けている。

What moments? Why, the moments of boredom, of weariness, of dissatisfaction. Rash moments. I mean moments when the still young are inclined to commit rash actions, such as getting married suddenly or else throwing up a job for no reason. (p.4)

*The Shadow-Line* は、「私」という船長が回想的に物語る1人称小説であり、“shadow-line”を前にした若き主人公「私」が船長として初めての航海に出、そこでの試練を経て成長する、という過程が描かれている。すなわち、青年前期も終りにさしかかった1人の若者の、成熟へのイニシエーションの物語であると言えるであろう。冒頭の文章が示唆するように、作中「私」は、その成長過程を語る上で、さまざまな「瞬間」を提示することになる。

本稿では、作品構成の上で重要な役割を果しているそれら「瞬間」について検討し、さらに、ロマン派文学からモダニズム文学へという伝統における、啓示的な“epiphanic moments”との関連、Conrad の創作意識という観点をも絡めて考察したい。

## I

「私」の体験する個々の「瞬間」を論じるに先立って、まず、作品構造という大きな枠組を捉え、また、そこにおける「瞬間」の位置付けを考えることが必要かと思われる。

*The Shadow-Line* は、非常にぎくしゃくとした不連続性を持つ物語である。突然の激情、衝動、瞬間などが多く見られ、それらを重ねることによって、作品の流れは分断され、その瞬間瞬間を念押しし、確認し、まるで、印を押していくような感を与える。しかしながら一方で、この物語は「流れていく」という前提を持つものなのである。その流れを演出しているのは、主に次の2つであろう。すなわち、1つは、主人公「私」の成長過程という流れであり、さらにもう1つは、作品の後半部において重要な位置を占める、船の進行という流れである。そしてその双方共が、滑らかに進まない。*The Shadow-Line* は、「流動と停滞」の物語であると言えるかもしだれない。以下に、作品の流れにおけるこの「流動と停滞」を検討し、さらに、それと「瞬間」との関係を考えてみる。

1人の若者のイニシエーションの物語として、作品前半部において、そ

の流れは、ほぼ主人公「私」の成長過程の流れと重なっている。真実を求め、「自分についての何かを見い出すこと」(“opportunities to find out something about oneself” p.23) を求めても得られぬ「私」は、倦怠の中にも常に性急で、前のめりに進んでいこうとする。これに対して、成熟した船乗りとして登場する Giles 船長は、終始落ち着き、動作もゆったりとしている。敢えて言うまでもなく、この 2 人の対比は、言わば、“shadow-line”を境にした“youth”と“maturity”的対比であろう。常に何かしらの衝動に突き動かされている「私」は、示唆深いが謎のような言葉を連ねる Giles 船長との会話において、苛立ち、そして突然の怒りを感じたりする。

He gave me a searching look, and in a benevolent, heavy-uncle manner asked point blank :

“Why did you throw up your berth?”

I became angry all of a sudden; for you can understand how exasperating such a question was to a man who didn’t know. (p.14)

こういった 2 人の会話を中心とする、1、2 章の作品展開の緩慢さは、しばしば批判される点である。<sup>3)</sup>しかし、このいろいろさせるような停滞の中でこそ、多くの突然の激情、瞬間の意識がもたらされているのである。ここで、以下の検討に先立ち、上の引用にも見られる「突然」(“sudden,” “suddenly”) という言葉が、作中随所に重ねて用いられていることに留意しておきたい。この言葉は、流れの連續性を中断させ、テクストに緊張と衝撃を与えるものであり、そのいくつかは、「瞬間」に結び付くもの、あるいは、「瞬間」に準ずるものだと思われる所以である。

また、さらに、船長の職を得た「私」を取りまく状況が、まるで魔法のように (“as if by enchantment” p. 39) 進んでいく一方で、主人公はしばしば孤独と静寂の中に引き籠り、果てしない想念の世界に浸る。しかし、後に見るように、この、物語の進行を一見停滞させるかのような“day-dreaming state” (p. 54) の中において、「私」の成長過程を展開させる重要な「瞬間」が訪れているのである。このように、作品前半部においては、

物語の「停滞」の中で「瞬間」が生じ、それによって主人公の成長段階が進むという逆接的な構造を指摘することができるであろう。

小説の後半部の船の進行は、作品の「流動と停滞」のパターンを、よりはっきりと明確に提示している。まず、船は、悪疫の発生によって、6週間もの間、うだるような熱気の中で、出航遅延を余儀なくされる。そしてようやく海へ出た後も、嵐（“dead calm”）によって船は動かないのである。下記の引用は、*The Rime of the Ancient Mariner*との近似をしばしば指摘される静止の世界の描写である。<sup>4)</sup>

With her anchor at the bow and clothed in canvas to her very trucks, my command seemed to stand as motionless as a model ship set on the gleams and shadows of polished marble. It was impossible to distinguish land from water in the enigmatical tranquillity of the immense forces of the world. A sudden impatience possessed me.

“Won’t she answer the helm at all?” I said irritably to the man whose strong brown hands grasping the spokes of the wheel stood out lighted on the darkness. (p. 76)

「私」の指揮する船は、まるで光と影の交差する、磨き上げた大理石の上に置かれた模型船のごとくに微動だにしない。このような全くの静止、船の進行の停滞に、主人公は、「突然の焦慮」（“a sudden impatience”）を覚えている。

船をとりまく全くの不動の世界、熱帯のむつとするような重い大気、闇、そして静寂。このような嵐の「停滞」が描かれ続けると、主人公のみならず、読者も、再び「流動」へと抜け出る「瞬間」を切望する、という効果が自然に生じるように思われる。さらに言うならば、この作品は、特に後半部において、「瞬間」を効果的に描く構造を持っていると言えるだろう。「流動と停滞」という対比が「瞬間」を必然的に浮かび上がらせているのである。

では次に、「私」の体験する、それら個々の「瞬間」がいかなるものであ

るかを、考察してみる。

## II

*The Shadow-Line* は、既に見たように、1人の若者の成長過程という、動的な流れを素材として作られているが、その流れの中にはそれと相矛盾するような静的な「瞬間」(static moments) がくさびのように存在している。しかし、逆にそれらが、「流れ」を発展させる「契機」ともなっていることがわかるのである。つまり、“shadow-line”を越えることによって “youth”から“maturity”へ至るのだという設定そのものが裏付けるように、主人公の成長過程は、徐々に進行する漸次的なものではなく、「瞬間的」な段階を契機に発展していくものなのである。

若き主人公「私」は、ある日、冒頭の引用にあるような「瞬間」を経験する。すなわち、「倦怠の瞬間」、「不満の瞬間」、「まだ若さの残っている者が、軽率な行動に走り出す瞬間」である。「善意の魔法使いでさえ作り得ぬ」申し分のない仕事場を放り出してしまったのだ。

And suddenly I left all this. I left it in that, to us, inconsequential manner in which a bird flies away from a comfortable branch. It was as though all unknowing I had heard a whisper or seen something. Well — perhaps! One day I was perfectly right and the next everything was gone — glamour, flavour, interest, contentment — everything. It was one of these moments, you know. The green sickness of late youth descended on me and carried me off. (p.5)

居心地の良い枝に止まっていた鳥が、急に飛び立つかのごとくのこの瞬間から、より成熟した船乗りへの成長という物語の流れが滑り出すことになる。その流れにそっている幾つかの主な「瞬間」を検討してみよう。

仕事を離れ、倦怠と焦燥の中にある「私」は、Giles 船長の助けを得て、思いがけない好機、初めての「船長」というポスト (“first command”) を手に入れる。そして「瞬間」が訪れるのである。「船長」という抽象概念だ

けでは得ることのできなかった歓喜の瞬間を、「私」は、ただ「船」という具体的な存在 (“the concrete existence of a ship” p. 40) を想うことによって、経験する。

A ship! My ship! She was mine, more absolutely mine for possession and care than anything in the world; an object of responsibility and devotion. She was there waiting for me, spellbound, unable to move, to live, to get out into the world (till I came), like an enchanted princess.... A sudden passion of anxious impatience rushed through my veins and gave me such a sense of the intensity of existence as I have never felt before or since. I discovered how much of a seaman I was, in heart, in mind, and, as it were, physically ... I had an exquisite moment. It was unique also. (p.40)

実体を持った「船」という存在が、「私」の想像力をかきたて、類のない「瞬間」を生み出したのだと言えるだろう。そして、それによって、生の実感、自分が船乗り以外の何者でもないのだということを知るのである。さらに、Bankok に着いて自分の船を目にした時、彼はその「船」が、「世にも類まれな女性のように、ただ存在するだけで無私の喜びを搔き立てる」そういう存在であることを知り、この上ない充実の瞬間を味わうのである。(pp.49-50)

船乗りにとって、ある意味では、日常の見慣れた存在の 1 つであるはずの「船」が主人公にもたらす、この不均合いなまでの突然の反応、啓示的な「瞬間」をいかに考えるべきであろうか。この瞬間は、物語の流れの上に静的なヴィジョンを生じさせているように思われる。孤独と静寂の中で主人公の想像力が生み出したものであり、可視的な世界を、その想像力によって変容させた審美的なイメージであると言えるかもしれない。

Conrad の作品におけるこういった「瞬間」を、「覚醒の瞬間」 (“moments of awakening”) すなわち “epiphany” であるという前提から、そのタイプをいろいろと検討した Jay B. Losey は、Woolf が指摘した “double vision” という Conrad の特質をあげて、それこそが、我々が “epiphany” と

認識しているものなのだとする。さらに、この“epiphany”を用いたことによって Conrad は、Wordsworth らロマン派の詩人によって確立され、モダニズムへと受け継がれていった伝統の中に位置づけられるのだとして、その“epiphany”を、Conrad の初期作品群にのみならず、*Nostromo* や *Under Western Eyes*、そしてこの *The Shadow-Line* においても見い出し得ると指摘し、それらが登場人物達の印象や、経験の意味を読者に示すために用いられているのだと述べている。<sup>5)</sup>

確かに、「私」は Giles 船長の何げない視線、彼とのとりとめのない会話の中で、「突然、まるで本を 1 ページめくったら、その前に書いてあったことの意味を全てはっきりさせてくれる一語にぶつかったような」(“All at once, as if a page of a book had been turned over disclosing a word which made plain all that had gone before” p.28) 啓示的瞬間を幾度か経験する。Robert F. Haugh も、Conrad の初期作 *Heart of Darkness* が、「Joyce が用いた意味における epiphany の物語である」と主張している。<sup>6)</sup>

だが、ここで 1 つの問い合わせをしておきたい。確かに、Conrad の作品の中には“epiphany”的な「瞬間」が存在する。しかし、それらを等しく Joyce らが用いた“epiphany”と同義であるとする前提是適切なのであろうか。つまり、Joyce の用いた“epiphany”と Conrad の“epiphany”的な「瞬間」との間に、相違点を見い出せたらと思うのである。「私」に訪れる次の「瞬間」を検討してみる。

「船」という存在によって生の歓喜の瞬間を味わい、自分が骨の髓までも船乗りであることを知った主人公は、さらに船長の椅子に腰掛けた時、鏡と向き合う孤独の中で、突然、「継承」というものを意識し、歴代の船長の魂の総和が、己の魂にささやきかけてくるような感を抱くのである。

I sat down in the arm-chair at the head of the table — the captain's chair.... A succession of men had sat in that chair. I became aware of that thought suddenly, vividly, as though each had left a little of himself between the four walls of these ornate bulk-

heads; as if a sort of composite soul, the soul of command, had whispered suddenly to mine of long days at sea and of anxious moments.

“You, too!” it seemed to say... (pp.52-53)

「お前もやはり」とささやく声は、さらに続けて、「私」が己の自我を見つめる過程において、又、厳しい海との闘いにおいて、彼らと共に経験を経ていくだろうと告げるのである。

これもまた、「船長の椅子」という対象が浮かび上がらせた、ヴィジョンの瞬間であると言えるであろう。「私」は、船長魂とでも言うべき伝統を垣間見るのである。しかし、ここで、特に留意しておきたいことは、上の引用においてはっきりと感ぜられる、他者とのつながりの意識である。本来、Joyceの用いた“epiphany”とは、孤独な精神性というものの上に成り立つものではないだろうか。もっと言うならば、芸術意識に基づいた、孤高の芸術的なものであるように思われる。一方、ここにおいて見られる瞬間は、一個人のもの、あるいは、場合によっては秘教的とまで言えるような性質を持つものではない。むしろ、*Lord Jim*などの作品のテーマとなっている“one of us”という、海の世界の絆に基づいた「瞬間」であり、共有する「瞬間」、受け継がれていく「瞬間」と言えるであろう。小説の中で、主人公は、試練を体験し、深く内省の世界に沈む孤独な存在であるが、一方で、常に何かしら、他者との「連帶」というものに支えられているという感を否めない。

さらに、先に挙げた Haugh は、Joyce が *Dubliners* で用いた“static, nondramatic epiphanies”と比べて、*Lord Jim* が、“a story developed by epiphany”であると指摘している。<sup>7)</sup> 前に触れたような、この作品における“epiphany”という語の使用の是非は別として、確かに、静的なヴィジョンの「瞬間」は、単に断続的に並列されているというよりも、物語の展開の上に生じていると言えるであろう。よって、船の伝統を意識した「私」は、嵐の苦しみの中で、今度は絶望の余り、「船がまるで浮遊する巨大な墓場だ

という病的なヴィジョン」（“a morbid vision of her as a floating grave” p.92）を持つのである。

M. H. Abrams は、その著書 *Natural Supernaturalism* の中で、ロマン派の作家達が描いた“Moments”について言及している。<sup>8)</sup> 彼の定義の一部を借りるならば、それは、日常の事物、出来事が、突然啓示へと輝く瞬間、過ぎゆくものを捉えるがごとくの瞬間、そして時というものを越えた永遠を垣間見る瞬間である。嵐に捕われた船の中で、「私」は、全くの静止と暗闇に包まれる。孤独と静寂が引き起こす、次に引用する「瞬間」は、魂の永遠との融和という点において、Abrams の言う“Romantic Moment”との類似性を感じさせるものかもしれない。

The quietness that came over me was like a foretaste of annihilation. It gave me a sort of comfort, as though my soul had become suddenly reconciled to an eternity of blind stillness. (p.108)

Abrams はさらに、“Romantic Moment”からの流れを受けた“Modern Moment”的多様性を示し、そのうちの1つとして、「生の真実を現わす」Conrad の“moment of vision”をあげている。<sup>9)</sup>

以上のように、主人公の成長過程、あるいは想念の流れの中には、ロマン派からモダニズムへの系譜との比較において、類似性と相違性を孕む静的な「瞬間」を指摘することができると言えよう。しかし、作品の後半部において生じる「瞬間」は、それらと性質を異にするものなのである。

作品の中で、主人公「私」は、「瞬間」を経ていく。倦怠の瞬間、生の実感を得る瞬間、船の伝統を認識する瞬間、嵐という苦難の中での絶望の瞬間、そして魂の永遠との融和の瞬間等である。これらは、「私」のイニシエーションの過程における、心の内面の「瞬間」である。ところが、船が海に出、嵐に苦しまされるようになってから、作中に、自然のもたらす、外因的な「瞬間」が加わってくることに気づく。すなわち、成長過程の流れ

の中の瞬間と、船の進行における瞬間が、微妙に重なり合わさっていくのである。以下、作品の終結部、嵐が崩れようとする「瞬間」を検討してみる。

悪疫と嵐によって難渢する船の中で、若き船長は、苦しい試練のただ中にいる。その心の内奥に合致するかのように船も動かない。そして、罪の意識と悔恨の中で「私」は、より深い自意識へと到達するのである。恐しい幻影にひるむ自分が、「たいした人間ではない」("I am no good" p.107)と日記に書き綴り、さらに、何の届託もなかった日々を“shadow-line”的向こうに想うのである：“It seems to me that all my life before that momentous day is infinitely remote, a fading memory of light-hearted youth, something on the other side of a shadow.” (p.106)

するとこの後、天候の変化が告げられ、船をとりまく暗黒の雲が大粒の雨をもたらすのである。

Raindrops. Enormous. Forerunners of something. Tap. Tap. Tap.  
...

I turned about, and, addressing Gambril earnestly, entreated him to “hang on to the wheel.” But I could hardly speak from emotion. The fatal moment had come. I held my breath. The tapping had stopped as unexpectedly as it had begun, and there was a renewed moment of intolerable suspense.... (pp.113-114)

主人公が“shadow-line”を越えたという示唆に追って重なるように、上のような「瞬間」が描かれている。海という状況のみが持ち得る、厳しい自然の外的瞬間が、主人公の内面の瞬間をより劇的に表していると言えよう。さらに、ここで見られる「瞬間」は、今まで挙げてきたような静的なヴィジョンの「瞬間」とは異なっている。「流動と停滞」の間の緊張状態であり、それは、状況をひっくり返す力を溜め、次の変化への積極的な契機ともなっている。つまり、流れの中で、言わば動的(dynamic)な役割を果している「瞬間」であると言えるだろう。そして、この緊張が破れる時、船

は海の上を滑り出すのである：“It was the moment of breaking strain and was relieved by the abrupt sensation of the ship moving forward as if of herself under my feet.” (pp.116-117)

このように、作品は、静的なヴィジョンの至高の瞬間によってではなく、むしろ海という限定的な、劇的な外因的瞬間を用いて終結に向っているのである。

### III

*The Shadow-Line* は、Conrad の晩年、死のほぼ10年前に執筆されている。彼の自伝的な「船長初体験」というものに、その素材が求められている点において、しばしば“*The Secret Sharer*”などに共通性を見い出されている<sup>10)</sup>が、むしろこの作品は、*Lord Jim* 等に代表される初期作品との脈絡を強く感じさせるものであるようと思われる。その脈絡の因をなすものの1つとして、消えゆく「瞬間」を留めようとする、彼の創作意識をあげることができるものかもしれない。

初期作 *The Nigger of the “Narcissus”* の序文において、Conrad の「瞬間」への言及を幾つか見い出すことができる。例えば、芸術家の使命に対する次のような一文がある：“To snatch in a moment of courage, from the remorseless rush of time, a passing phase of life, is only the beginning of the task.”<sup>11)</sup> このような、仮借なき時の連續性の中に「瞬間」を捉え、そしてそれを描こうとする芸術意識は、すでに指摘したように、ロマン派からモダニズムへの伝統と通ずるものであろう。しかしながら、この作品の中にのみ限った考察が許されるならば、Conrad 独自の「瞬間」の特質を幾つか指摘できるよう思う。まず、それぞれの瞬間は作品展開に大きく寄与している。そして、「見させること」(“make you see”) を創作の目標に置く Conrad にとって、「瞬間」は、主としてヴィジョンの瞬間であるが、それらは超越的なものというよりも、むしろ「可視的世界」(“visible world”) と結びついたものである。また、「連帯感」(“solidarity”)

という彼のテーマを、作中の、伝統や絆によって共有する「瞬間」の中に見い出し得よう。この作品が、第一次大戦に従軍中の息子 Borys, そして同じ世代の若者達に捧げられている点を考えるならば、それは、より普遍的広がりを持つ共有の瞬間であると言えるかもしれない。さらに、外界から遮断された船という状況を用いて、孤独と内省の中で主人公が体験する内的な瞬間を追い描きながら、最終的には、外的な瞬間によって作品が解決されているという点は、Conrad の作品世界における「瞬間」を考える際に、非常に興味深い問題であると思われる。

最後に、Conrad は *The Shadow-Line* の序文において、この物語は、自分自身の体験を、時を経て、「心の目」("the eye of the mind") で眺めたものであり、「愛情」("affection") によって色づけしたものであると述べている。<sup>12)</sup> しばしば回想という形で自分の体験を作品にした Conrad にとって、「瞬間」は、薄れゆく彼自身の過去の記憶の中で、ある種の郷愁を伴って重きをなす、「海」と「若さ」、この2つと切り離せないものだと思われるるのである。<sup>13)</sup>

### 注

- 1) Joseph Conrad, *The Shadow-Line*, ed. Jeremy Hawthorn (Oxford University Press, 1985), p.3. 以下、本文からの引用は、Dent's Collected Editionに基づいたこの The World's Classics 版に拠り、頁数のみを引用末尾に記す。なお訳文は、朱牟田夏雄訳（中央公論社「新集世界の文学24」, 1971）を参考にさせていただいた。
- 2) 主に『日脚』と訳されているが、『陰影線』、『黎明期』、『日なたと日陰の境界線』など多様。批評家によっても、解釈は微妙に異なっている。例えば、Ian Watt, "Story and Idea in Conrad's *The Shadow-Line*," *Modern British Fiction*, ed. Mark Schorer (New York : Oxford University Press, 1961), p.123. 参照。また、本文からの以下の引用は、主人公が“shadow-line”を越えることを予感させる文章である。

One morning early, we crossed the bar, and while the sun was rising splendidly over the flat spaces of the land we steamed up the innumerable bends, passed under the shadow of the great gilt pagoda, and reached the

- outskirts of the town. (p.47)
- 3) 例えば、Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (Cambridge: Harvard University Press, 1958), p. 32. 参照。
  - 4) Paul B. Newman, "Joseph Conrad and the Ancient Mariner," *Kansas Magazine*(1960), pp.79-83. 他。
  - 5) Jay B. Losey, "'Moments of Awakening' in Conrad's Fiction," *Conradiana*, xx, 2 (1988), pp.89-108. 但し、*The Shadow-Line*に関する検討はなされていない。
  - 6) Robert F. Haugh, *Joseph Conrad : Discovery in Design* (Norman, Oklahoma : University of Oklahoma Press, 1957), p.39.
  - 7) *Ibid.*, p.40.
  - 8) M. H. Abrams, *Natural Supernaturalism* (W. W. Norton & Company, 1971), pp.385-390.
  - 9) *Ibid.*, p.419.
  - 10) 例えば、Carl Benson, "Conrad's Two Stories of Initiation," *PMLA*, LXIX (1954), pp.46-56.
  - 11) Joseph Conrad, *The Nigger of the "Narcissus"*, ed. Robert Kimbrough (W. W. Norton & Company, 1979), p.147. 以下の“make you see,” “visible world”, “solidarity”もこの序文の中に見られる。
  - 12) Joseph Conrad, *The Shadow-Line*, p.xxxxix.
  - 13) 「海」と「若さ」は言うまでもなく、初期作品群における主要な要素である。“Youth”において、若き Marlow が目指し、青春の瞬間を刻み付けたと同じ Bankok から、*The Shadow-Line*の「私」が航海を始めているという設定を考えると興味深い。